



👁️👁️ みどころ

2016 年の大統領選挙とトランプ勝利を巡って急浮上した「ロシア疑惑」とは一体ナニ？そんな“リーク事件”をいち早く映画化した『スノーデン』(16 年)にも驚かされたが、続く本作にもビックリ！しかも、本作は若手女性監督が作った舞台の大ヒットを受けて、「FBI 尋問録音データを完全再現」した「衝撃の 82 分」だから、さらにビックリ！

“第 2 のスノーデン”と呼ばれた女性リアリティ・ウィナーは、なぜ〈国家の反逆者〉になったの？そしてまた、正義感は、悪なの？

FBI 捜査官の最強尋問テクニック(＝引き出し法)を検証しながら、リアリティが〈国家の反逆者〉(?)になっていった真相に、少しでも迫りたい。

■□■スノーデン vs リアリティ。どちらもロシア疑惑！■□■

あなたは、オリヴァー・ストーン監督のアメリカ・ドイツ・フランス映画『スノーデン』(16 年)、『シネマ 39』126 頁)を知ってる？エドワード・スノーデンは元 CIA 職員、元 NSA(米国国家安全保障局)職員だったにもかかわらず、2013 年 6 月に NSA による大量の個人情報収集を内部告発した人物とされ、ロシアに亡命してしまったが、彼は英雄？それともスパイ？2016 年 11 月の大統領選挙でヒラリー・クリントン候補に勝利したドナルド・トランプ新大統領とロシアのプーチン大統領との仲の良さは際立っていた(?)ため、トランプ新大統領がプーチン率いるロシアの諜報機関に弱みを握られているのではないかとその声が強かったことは事実だ。そのため、私は同作の評論で「トランプ新大統領のスノーデンの評価は？」という小見出しで疑問点を披露したが、もちろんその回答は不明のままだ。

私は同作ではじめてエドワード・スノーデンがそんな人物であることを知って興味を持

ち、問題点を掘り下げたが、『リアリティ』と題された本作は一体ナニ？実は、これもリアリティ・ウィナーという、2017年当時、NASの契約社員だった25歳の女性の名前だ。彼女は【ロシアのハッカーによる2016年アメリカ大統領選介入疑惑に関する報告書】をメディアにリークした罪でFBIに逮捕されたが、この「リーク事件」が、「トランプ大統領誕生は、ロシア政府に仕組まれたものだった！？」という論争を全米で巻き起こすことになった。すると、リアリティという女性は、スノーデンという男性と対比して考えると、より面白そうだ。

それにしても、こんな現実の、しかも直近の大論争となった“政治ネタ”がすぐに映画化されるとは、さすがアメリカ！さすがハリウッド！

■□■一方の監督はオリヴァー・ストーン！本作の監督は？■□■

『スノーデン』の監督は、『プラトーン』(86年)、『JFK』(91年)等の社会問題提起作を次々と発表し続けるオリヴァー・ストーン監督だった。それに対して、本作の監督は、本作が長編デビュー作である、1974年生まれ的女性、ティナ・サッター。なぜそんな若い女性監督が、本作のような映画を監督したの？

それはプロダクションノートに書かれているとおり彼女が「記録文書を読み始めた時、まるで映画の脚本のように感じた」ためらしい。彼女は「FBIの記録文書でありながら、そこには生命力が秘められていました。リアリティの人生を変える瞬間が示されていたのです」と語っている。そこで、彼女が2019年に完成させたのが、『Is This A Room』と題する舞台だ。台詞をすべて実際の記録から使用し、俳優は記録されたまま忠実に事実を再現するという、この“実験的な舞台”は大反響を呼んだらしい。その大成功を元に、彼女は本作の脚本を書き、監督を務めたというわけだ。

■□■ロシア疑惑とは？なぜ反逆者に？正義感は悪なのか！■□■

本作のチラシには「第2のスノーデン」と呼ばれた女性リアリティ・ウィナー 彼女はなぜ、〈国家の反逆者〉となったのかー」の文字が躍り、さらに「正義感は、悪なのか」とも書かれている。他方、『スノーデン』のチラシには「米国最大の機密を暴いた男 彼は英雄か。犯罪者かー。」の文字が躍っている。しかして、スノーデンとリアリティ両名に共通するテーマである、2016年の大統領選挙を巡る「ロシア疑惑」とは一体ナニ？

それは一言で言えば、ロシアが2016年の米国大統領選挙を妨害しようとしたこと。つまり、ロシアによる、民主党のヒラリー候補を落選させ、共和党のトランプを当選させようとする企みのことだが、その内容(実態)の把握は極めて難しい。そのため、スノーデンが英雄なのか、それとも反逆者なのかの判断が難しいのと同じように、「第2のスノーデン」と呼ばれたリアリティが、なぜ国家の反逆者になったのかの判断も、そしてまた、「正義感は、悪なのか」の判断も難しい。ちなみに、来る2024年1月に実施される台湾の総統選挙では、“中国疑惑”＝中国による総統選挙の妨害＝民進党候補を落選させ、国民党候補を当選させようとする企みが活発になっているらしいが、そこでも、誰が反逆者で、何が正

義かの判断は難しい。

このように、“ロシア疑惑”も“台湾疑惑(？)”も実態の把握は極めて難しい。表現の自由や報道の自由と、これらの疑惑との“ぶつかり合い”を正確に判定するのはほとんど不可能かもしれない。ちなみに本作のパンフレットには、上智大学教授・前嶋和弘氏の「映画『リアリティ』の背景：ロシア疑惑とアメリカ民主主義の危機」と題するコラムがあるので、これは必読！

■□■FBI 尋問録音データを完全再現！本作もドキュドラマ？■□■

本作はドキュメンタリー？それとも劇映画？その判断は難しい。「FBI 尋問録音データを完全再現」を謳い文句とした本作が、フィクションではないことは明らかだ。しかし、そうかと言って本作は“単なる再現ドラマ”ではないし、もちろんドキュメンタリー映画でもない。「FBI による尋問の音声記録を、ほぼ一言一句そのまま上演する」というコンセプトの映画『リアリティ』は、唯一無二の、奇妙な、そして忘れがたい豊かな味わいをもつスリラーだ。」本作のパンフレットにある稲垣貴俊氏（ライター・編集者）の「現実と虚構の狭間で——「完全再現」が広げる無限の想像」と題されたコラムの冒頭には、そのように書かれている。

本作と同じようなコンセプトの映画が、「ドキュドラマ」と称された『ユナイテッド 93』（06 年）『シネマ 12』（29 頁）だった。私はその評論で「これぞドキュドラマの最高峰！」の小見出しで「映画前半の管制塔を中心とした瞬時の情報収集と整理そして決断という作業のくり返しは、2001 年 9 月 11 日に現実展開されたものを忠実に再現しようとしたものだけにリアル感があるし、後半のユナイテッド 93 便内部での乗客による「決起」は、ハラハラドキドキ、手に汗を握るドラマとなっている。そしてやっと、乗客たちがコックピット内に突入し、犯人たちから操縦桿を奪い取ったにもかかわらず機体は・・・？これぞドキュドラマの最高峰！」と書いた。これらの展開におけるすべての台詞は当然、管制塔の交信記録に残っているものと同一だから、それは本作も同じだ。しかし、FBI の尋問記録にはいわゆる“黒塗り”（伏字）の部分があるはずだから、それが『ユナイテッド 93』と大きく違うはずだ。すると、ティナ・サッター監督は、その黒塗り（伏字）の部分をどうやって演出したの？新たな台詞を作り出したの？それとも俳優の表情だけで表現したの？それとも・・・？

なお、本作のパンフレットには、小川泰平氏（犯罪ジャーナリスト／元神奈川県警刑事）の「衝撃の 82 分！一気に引き込まれる」もあるので、これも必読！本作における、ティナ・サッター監督の素晴らしい挑戦をしっかりと見届けたい。

■□■リアリティのリアリティさに注目！2 人の捜査官は？■□■

現在放映中の朝ドラ『ブギウギ』では、笠置シズ子モデルにした福来スズ子役に扮した女優・趣里がコテコテの大阪弁で奮闘しているが、本作ではリアリティ・ウィナー役に抜擢された女優シドニー・スウィーニーが素晴らしい演技力を見せているので、そのリア

リティ（ぶり）に注目！スーパーで買物をした帰り道、突然、ギャリック（ジョシュ・ハミルトン）、テイラー（マーチャント・デイヴィス）の2人のFBI特別捜査官から声をかけられたリアリティの驚きはいかにばかり？更に、その後じわり、じわりと“理詰め”で迫ってくる質問（追及）に対して、リアリティはどう対応するの？

他方、当初の被疑者への接触ぶりを見て心底驚くのは、2人の特別捜査官の丁寧さだ。これは、「あくまで任意捜査だよ」ということを納得させるためだが、これを見ていると中国やロシアと違い、民主主義国での捜査がいかに大変かがよくわかる。違法収集証拠が証拠能力を持たないことは今や日本の刑事訴訟法でも常識だが、民主主義の本国たるアメリカでは、しかもFBIでは、違法捜査とされないための工夫（仕組み）がいかに頑丈に構築されているかを、本作でしっかり検証したい。

■FBI最強尋問テクニック（＝引き出し法）に注目！■

本作のチラシには、「どんな容疑者も“落とす”—— 禁断の人心掌握メソッドで追い詰めるFBI捜査官との、究極の心理戦！」の見出しが躍っている。そして、尋問テクニック（引き出し法）＝心理学・行動学に基づきFBIが編み出した、相手に指1本触れずに情報を引き出す手法として、

- ・親切心を見せ、信頼関係を築く
- ・「無知なふり」で油断させ、「推測を述べる」ことで情報を絞る
- ・「間違った情報を訂正したい」欲求をくすぐる
- ・・・・ビジネス、恋愛、親子関係、日常会話の至るところに〈引き出し法〉は潜んでいる！

と書かれている。これは“悪用厳禁！？”と注意書きされているが、“法廷技術”の1つとして証人尋問の技術、とりわけ反対尋問の技術を必死で学んできた弁護士としての私は、これには要注目！

もっとも、そんな興味は私だけのものかもしれないが、一般の人でも、本作の2人のFBI捜査官にみる尋問テクニックは十分興味深いものだと思うので、是非その「最強尋問テクニック（引き出し法）」に注目しながら本作を見てもらいたいものだ。

2023（令和5）年12月7日記